

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006年度～2008年度

課題番号：18520274

研究課題名（和文）

敦煌文献中にみられる説話文学資料の基礎的研究

研究課題名（英文）

Study on Dun-huang Narrative literature manuscripts

研究代表者

荒見 泰史（Hiroshi Arami）

広島大学・大学院総合科学研究科・准教授

研究者番号：30383186

研究成果の概要：

中国敦煌出土の唐五代写本には未だに膨大な未解読の文献が残されている。こうした敦煌文献の中には中国文学研究と日本文学研究の狭間にあって見落とされがちな文献も多く残され、調査研究が待たれている。本研究では、そうした敦煌文献中『金藏要集論』や『諸経雑縁喩因由記』などの説話文学資料について、調査、翻刻作業と電算化をおこない、日本の唱導文芸、説話文学に影響を及ぼしたと見られる中国の唱導、講経などの実態をつかむための基礎資料作りをおこなった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,200,000	0	1,200,000
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	690,000	4,190,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、各国文学・文学論

キーワード：中国文学

1. 研究開始当初の背景

中国敦煌出土の唐五代写本は1900年の発見から今日に至るまでに修復、整理研究がつづけられ、その総数64,000点にもおよぶ膨大な文献の解読、翻刻作業が進められている。ただ、敦煌文献は出土文献であり、仏教経典

を中心に儒家経典、道経経典、文学作品などの多方面にわたる文献が残され、さらには当時の寺院文書、経済文書、メモ書きにいたるまでの当時実用されていた文献までが混然としているため、これらを研究するためにはさまざまな視点から多角的におこなう必要があるのだが、あまりに総数が膨大であるこ

とと研究人員がそれに比して少ないことから、未整理、未解読のまま放置されている文献も依然として多い。仏教經典1つとっても、今日までに伝えられず逸書となっている文献も多く残されている。

筆者は、こうした敦煌の未解読文献の中には中国文学研究と日本文学研究の狭間にあつて見落とされてきた視点もあり、少し視点を変えるだけで、日中の文学研究のさまざまな問題点を解決できる資料となりうると考えている。たとえば、本研究で中心とした説話研究、唱導研究といった視点は、日本文学研究の重要な視点として長く経験や蓄積を持つが、中国学研究を中心におこなわれる敦煌文献ではこうした視点がとられることはほぼなかったといえる。

より具体的には、説話文献の中には『衆経要集金藏論』があるが、これは折口信夫氏がかつて唱導文学を提唱したときに提起された『日本霊異記』の成立に深く関係しているとされ、日本の説話文学研究では早くから注目されてきた文献である。しかし、この『衆経要集金藏論』は日本国内には僅かしか残されておらず、当時の唱導活動にどのように使用されてきたかなどを知る手がかりは少ない。自然、研究が深化されることがないままとなっているのが現状である。しかし敦煌の文献にはこの『衆経要集金藏論』がじつに多く残され、しかもそれが寺院内で唱導に使用されていた文書として残されていたことから、どのようにその文献が使用されていたか、どのように唱導がおこなわれていたかを知る手がかりを多く残している。

また、敦煌で唱導がおこなわれた中でこうした『衆経要集金藏論』などの説話をさらに編集しなおして唱導の台本としたとみられる『諸経雜縁喩因由記』などの通俗の文献もある。この『諸経雜縁喩因由記』では、説話が仏教の法会のなかでどのように語られていたかを物語るかのように法会の儀式次第などとともに説話が記録されている。これによってより具体的に仏教の法会の中でどのように説話が扱われてきたかを知ることができるのである。以上に示してきたのは本研究による発見であるが、このような発見は、これまで日本文学研究と中国学研究の狭間の中で見落とされていた視点によって生まれたものであるといえよう。

本研究では、以上のような背景から、敦煌研究に新たに日本の唱導研究という視点を導入し、改めて文学発展に関する資料を探索し、資料集成を作り上げていく基礎的研究をおこなうことを思い立った次第である。

敦煌文献には、変文、講経文といった講唱文学作品が多く残されていることが知られているが、本研究に挙げるような唱導文学資料は、講唱文学発展の前段階と位置づけるこ

とができ、本研究によって変文、講経文発生の経緯なども解明されると予測されるところである。

2. 研究の目的

本研究では、「1. 研究開始当初の背景」に示してきたような背景によって、膨大な敦煌文献中で見落とされてきた説話文学資料、唱導文学資料について、あらためて調査、翻刻作業と電算化をおこない、新たな研究領域を開拓するための基礎資料作りを主目的としている。

膨大な敦煌文献中の説話文学資料、唱導文学資料は、『衆経要集金藏論』、『諸経雜縁喩因由記』以外にもまだまだ多く残されている。これらは日本の説話文学、唱導文学の起源となったと予想されるばかりか、中国において発達した講経、変文語りなどの中国の講唱文学成立の背景ともなったと考えられ、これらの文献を改めて整理研究する一連の敦煌の唱導文学研究は、それらの日中の文学研究において重要な領域へ発達成長させるためにきわめて重要な研究であると考えられるのである。

3. 研究の方法

研究は以下の手順でおこなった。

(1) 敦煌文献中から説話文献、唱導文献を広く探索し、目録を作成した。この段階では、今後の研究における枠組み作りと位置づけ、説話文献に限らず、仏教の法会に関わる文献を広く収集し、目録に加えている。敦煌文献の調査においては、東洋文庫所蔵マイクロフィルム、『敦煌宝蔵』、『敦煌トルファン文献集成』などの写真資料を利用しておこなった。写真資料としては『国家図書館蔵敦煌遺書』も現在継続刊行中であり、これも随時購入しておこなった。そのほか中国国家図書館を数度訪問し、敦煌文献の原資料の確認をおこなった。

(2) 手順(1)で作成された成果である目録を元に、『衆経要集金藏論』、『諸経雜縁喩因由記』などの説話文献を中心に翻刻作業をおこなった。翻刻作業には、研究代表者、研究分担者が中心となってあつたほか、中国の首都師範大学金滢坤副教授に翻刻作業を依頼し分担して作業に当たってもらった。なお、ここでも中国国家図書館において適宜原典の確認作業もおこなった。

またこの作業に当たって、復旦大学陳允吉教授、浙江大學張涌泉教授の元を数度にわたって訪問し、難解字の読解作業に協力を得ている。

(3) 手順(1)(2)によって得た成果を整理し、翻刻資料集を作成した。この資料集は紙媒体によるものとPDF形式による電子媒体によるものの2種類を用意し、検索のための便を図った。これらの最終作業に際して、首都師範大学金澄坤副教授に出張を依頼し、広島大学において確認作業に当たってもらっている。

4. 研究成果

主たる研究成果としては、3.によって示した翻刻資料集のほか、それらの整理翻刻作業を通じて発見されたことを整理し、日中両国語によって国際学会、シンポジウム、研究論文として報告をおこなってきた。

そうした成果はすでに一定の反響を得ている。例えば、2007年6月に開催された「日台共同ワークショップ 仏教文献と文学」では台湾南華大学の鄭阿財教授、筑波大学の本井牧子氏らによって大きくとりあげられ、本研究の結果をもとにさらに深化された議論がおこなわれた。また日本の唱導文学研究者からも多く問い合わせがあり、人間文化研究機構の連携研究から共同研究の依頼も受けている。

今後も継続的に敦煌文献の調査を行い、新たな文献の搜索、整理翻刻を続けることによって、敦煌の唱導文学研究という新たな研究領域を確立し育てていくことができると確信している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計11件)

① 荒見泰史、「敦煌本“莊嚴文”初探」、『文献』第2期、査読有、42～52頁、2008年4月。

② 遊佐 昇、「道観と中国社会—『道教靈驗記』宮観靈驗訳注(2)』『応用言語学研究』明海大学大学院 No.10、査読有、155～166頁、2008年3月。

③ 荒見泰史、「從新資料來探討目連變文的演變及其用途」、『敦煌學』第27輯、査読有、127～152頁、2008年2月。

④ 荒見泰史、「九、十世紀の通俗講經和敦煌」、『敦煌學輯刊』第2期、査読有、67～74頁、2008年1月。

⑤ 荒見泰史、「敦煌における仏教の唱導活動」、『国文学解釈と鑑賞』10月号、至文堂、査読有、99～108頁、2007年9月。

⑥ 荒見泰史、「關於BD00876《大目乾連冥間救母變文》的一些問題」、『文津學誌』第2輯、中国国家圖書館出版社、査読有、p.136～140頁、2007年8月。

⑦ 遊佐 昇、「道観と中国社会—『道教靈驗記』宮観靈驗訳注(2)』『応用言語学研究』明海大学大学院 No.9、査読有、177～188頁、2007年3月。

⑧ 荒見泰史、「孟蘭盆經の新資料、上海圖書館藏068『孟蘭盆經讀述』」、『西域出土文獻研究』第4号、査読有、37～54頁、2007年2月。

[学会発表] (計3件)

① 荒見泰史、敦煌の唱導資料と表演、「ユーラシアと日本」国際シンポジウム2008、2009年3月29日、国立歴史民族博物館

② 荒見泰史、唐五代の唱導と表演、人間文化研究機構連携研究「ユーラシアと日本」唱導文化の比較研究会、2008年11月3日、明治大学駿河台キャンパス

③ 荒見泰史、從敦煌寫本中變文的改寫情況來探討五代講唱文學的演變、人間文化研究機構連携研究「ユーラシアと日本」唱導文化の比較研究会、2006年12月21日、(台灣)南台科技大學

[図書] (計2件)

① 高田時雄、劉進宝、荒見泰史、鄭阿財等共著、上海古籍出版社、『轉型期的敦煌學』、2007年11月、147～170頁(「轉型期的敦煌變文研究」の項)。

②劉永增、王惠民、劉進宝、荒見泰史、鄭阿財等共著、上海古籍出版社、『2004年石室研究國際學術會議論文集』、2006年11月、313～349頁（「關於地藏十王成立和演變的若干問題」の項）。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

荒見 泰史 (Hiroshi Arami)
広島大学・大学院総合科学研究科・准教授
研究者番号：30383186

(2) 研究分担者

遊佐 昇 (Noboru Yusa)
明海大学・外国語学部・教授
研究者番号：40210588

(3) 連携研究者

(4) 研究協力者

金 滢坤 (Yingkun Jin)
首都師範大学・歴史系・副教授

陳 允吉 (Yunji Chen)
復旦大学・中国語言文学系・教授

張 涌泉 (Yongquan Zhang)
浙江大学・古籍整理研究所・教授